

徹底分析

# 北京のクーデター

## 何が起り、何が始まったのか

### 第五の男 汪東興をめぐるナゾ

七日 華国鋒殺害未遂のカド  
で、王洪文、張春橋、江青、姚文  
元ら文革派、上海グループが逮  
捕、あるいは、処刑される。

八日 毛沢東記念堂の建設、  
「毛沢東遺集」「同全集」の責任  
者は華国鋒と発表。

九日 華国鋒が党中央委主席、  
党軍事委主席に就任の横断幕や壁  
新聞が現れる。

十日 「人民日報」など三紙誌  
共同社説で「華国鋒同志をはじめ  
とする党中央の周りに団結」を訴  
える。

北京クーデター・の推移をたど  
ると、こういことになるが、文

赤い巨星・毛沢東が墜ちてひと月余り…

と、そこへ降って湧いたように「江青  
未亡人逮捕」のビッグ・ニュース。さす

が中国というか、まさに「三国志」を地で  
ゆく権力闘争劇の展開だ。今日の激動をつ

とに予想していた竹内実、中嶋嶺雄、それ  
に、菊地昌典の三氏に、シンポジウム形式

で語り合ってもらった。

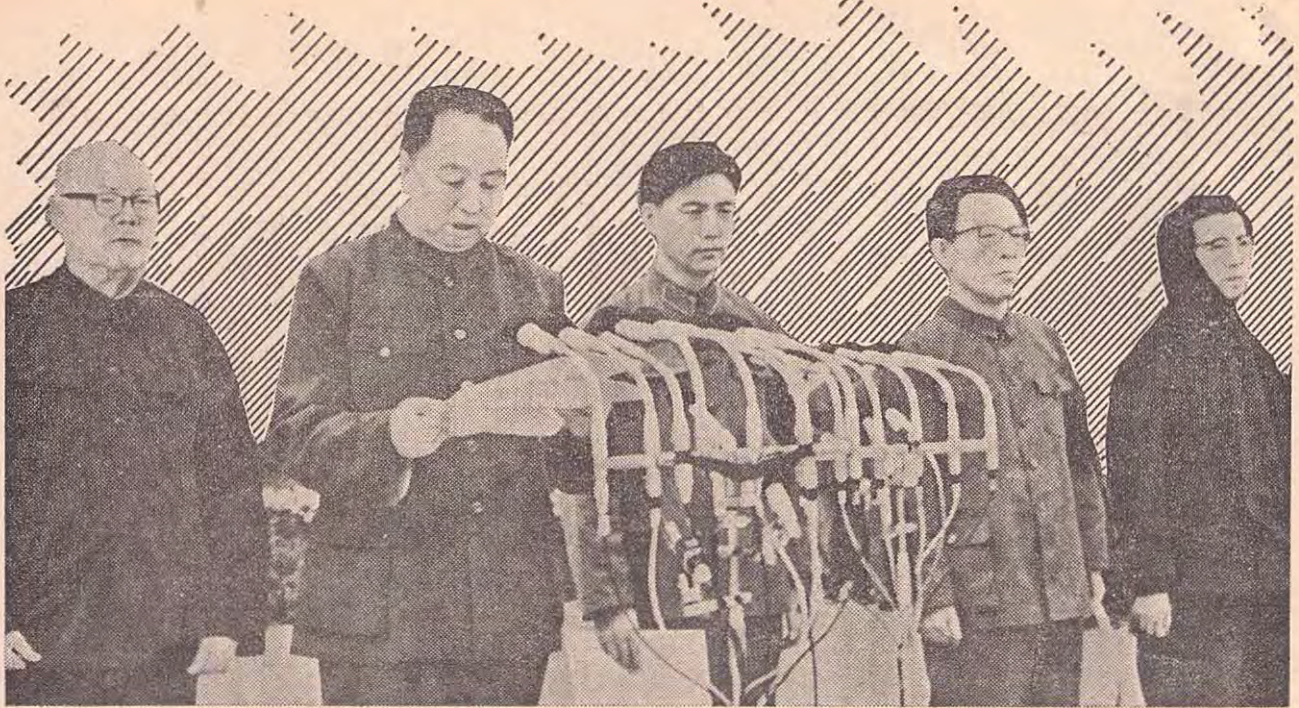
(文中敬称略)

革派四首魁の逮捕を聞いて、多く  
の中国専門家がクビをかしげたの  
は、文革派、第五の男、汪東興  
(党政治局委員)の名前が、逮捕  
者の中になかったことだった。

クーデターの決め手になるの  
は、むしろ、軍事力である。軍へ  
の影響力は、文革派、華国鋒派の  
間で、どうなっていたのか。そこ  
に、今回の政変を解くカギがある  
が、その十字路に立っていたのが、  
北京衛戍区第八三四一部隊を率  
いる汪東興であった。

東外大助教授・中嶋嶺雄氏(現  
代中国論)は、  
「北京の首都労働者民兵師団は文  
と疑問を投げたあと、  
「最初に考えられるのは、北京軍  
区司令・陳錫聯(実務派の政治局  
委員)が首都労働者民兵を率いる  
倪志福を抑え、ついで近衛隊とは  
いえ解放軍として指揮下にある八  
三四一部隊と中央警衛処、この両  
方の指揮官・汪東興を電撃的に抑  
えた、ということですね。だから  
汪東興は動けなかった」  
と推測する。これに加えて、京  
大教授・竹内実氏(中国文学)  
は、いう。

「要人の護衛のシークレット・サ



毛主席追悼大会（9月18日）で、左から葉劍英、華國鋒、王洪文、張春橋、江青の中国首脳



姚文元氏



汪東興氏

ービスというのは、江青らを守る半面、彼らのお目付役でもある。かれらは、中央警衛処指揮官の汪東興の命令に従うのであって、要人のいうことを聞くのではない」そこで、両氏が注目する汪東興の動きだが、

「江青らが文革派である汪東興を使つて行動を起こそうとしたが、汪が話にならないで華国鋒に通告、つまり返返つたため、正規軍との間に流血の衝突も起こらなかつた。こう見れば、第五の男、汪東興が逮捕者の名の中にまた出てないナンもとける」と両氏は一致する。

汪東興は、延安時代からも毛沢東のボディガードといわれた忠臣中の忠臣だった。それが毛沢東の死後、江青夫人ら毛沢東に近

い、文革派、を裏切つたとしたら、その理由は何なのか。中嶋氏の見方――。

「社会主義の論理というよりネポティズム（同族・縁故者登用）なんでしょうね。江青ら四人が上海グループ（注・王洪文・姚文元の夫人は江青の娘という説もある）であるのに対して、汪東興は本来の毛側近グループ、同じ文革派でも、上海グループとは別の存在だった。かつて文革で陳伯達（注・毛沢東のブレインといわれた人物）が失脚したのも、江青夫人と折り合いが悪かつたからともいわれませんが、汪東興の場合も文革派といわれながら、その種のモヤモヤがあつたのではなからうか」

文革派といえは、江青らを逮捕した華国鋒も文革派とみられていた。だからこの事態は文革派の分裂、つまり江青らの、都市型急進グループと、湖南省での実績が認められて中央へと急上昇した華国鋒ら、地方型穏健グループとの対立抗争という見方もある。

ところで、毛主席の遺言や指示の改ざんはあつたのか、なかつたのか。東大助教授の菊地昌典氏（『遺現代史』）は、レーニンの場合と比較して、

「レーニンの場合は、口述ながらもハッキリ文字になつた遺言があつて、死後に非公開の中央委員会にかけられている。それが三十二年後（一九五六年）に公開されたけれど、レーニンはスターリンが書記長にとどまつて、専横化することに危惧の念をのべているのである。ですから中国でも、遺書の有無や改ざんについては、今は何も言えません」と慎重である。

竹内教授の見方は、少しちがう。

「毛主席の病氣中は江青夫人らしか近づけず、改ざんや偽造は可能だつたでしょう。しかし従来も、毛語録にそのまま載せにくい形でしゃべっている場合、毛沢東以外の人による修飾や加筆は当然あつて、それが習慣的に大目に見られていた面もあつたと思う。それを、ねつ造、だというとするれば、華国鋒らが勝つたからこそ言えることではないですか」

確かにいま伝えられている江青ら四人の罪状は、勝つた側の見方が強く働いていることは、いふまでもない。

「だから、華国鋒らが先手を打つて勝つたという形でみれば、今度の事件は、江青クーデター、というより、華国鋒クーデター、とも解釈できるんですよ」

# バラシサー 華国鋒の決断

と竹内氏。  
「その意味でも、これは林彪事件（一九七一年九月）と同じ。林に本当にクーデターの計画があったのかどうか。憲法で毛沢東の後継者とまで決められた林彪の失脚

には、今でもナゾが多すぎる」と中嶋氏も同調する。  
林彪事件といえは、華国鋒は、この事件の処理を毛沢東から命じられ、これをキツカケに公安部門をにぎる。現在も公安部長を兼ね

ているものと思われるが、汪東興も、林彪事件処理で活躍した形跡がある。とすれば、華国鋒と、第五の男、汪東興の深い関係は、林彪事件のころから出来ていたのかもしれない。

日報」(注・当時は江青派が抑えていた)の論文によると、走資派に対する党内闘争を徹底させることで、ブルジョア路線の命を革することだとしぼっている。これは華国鋒に対して「やるぞ」という宣戦布告だった。江青らがねらうのは当然「江青主席」でしょう」と竹内氏。

氏)ともみられるが、いずれにしても、それを黙認する勢力が当然あったに違いない。  
その勢力とは何か。  
「ずばり、李先念副首相を氷山の一角とする湖北省黄安出身のグループ」とみるのは竹内氏。中嶋氏も同じ意見だ。

それにしても、あまりにもドラマチックな事件の展開だが、竹内氏は意外ではなかったという。

という情報が一部にあるが、竹内氏は、むしろ、オープンな場ではないきなり射殺されたとみる方が自然だと、まさに「三國志」のシーンを思わせる大胆な予測をする。

かたという説と、処刑はなかったが二人の死者が出たという説がある。ところで、政治局会議が決裂した原因は何か。

現に周恩来のケースからいけば、毛沢東の喪は追悼大会(九月十八日)であけたはずなのに、國務院にはその後もずっと平旗が掲げられていたと報道されているように、双方ともに喪という休戦期間をできるだけ延ばしたかった。

李先念は軍の長老だし、現在は財政担当。同じ黄安出身者には、北京军区司令の陳錫聯、広州军区司令の許世友、瀋陽军区司令の李德生らがいる。おまけに、かれらの中には第一野戦軍系統というか、鄧小平系統、ひいては周恩来系統とながる人が多い。劉伯承(政治局委員)、葉劍英(副主席、国防相)ら軍の長老も、かれらと悪いはずはなく、いわゆる実務派とみていい。いずれも文革に怨念を持つている勢力である。

中国軍閥時代にもあった。たとえば、張作霖が可愛がっていた有力者を、息子の張学良は宴席に招いて殺してしまつたでしょう。政治とは権力闘争であり、権力闘争とは血が流れることだ。これを「イヤだ」と思う日本人の心は大事にすべきですが、こんどはそれが事実で示されたといえましょう」

江青ら四人の文革急進派は、陰謀会議の場で逮捕・軟禁された、華国鋒は、それぐらいのことをやつても政治的にマイナスはない、江青らは人民の支持を失っている、と読んだと思う。そこに華国鋒の決断があつた」

「一説によると、上海グループは「江青主席」を要求、その実現のために華国鋒殺害を計画したという。しかし文革派の、錦の御旗は「既定の方針にしたがつて事を運ぶように」という毛主席の遺言。華国鋒を後継者ぶくみで第一副主席にしたのが毛主席の意向だったとすれば、「江青主席」は毛主席の遺言に反することになる。だから江青らの要求は、王洪文に加えて江青副主席、張春橋・首相といったところにあつたのでは、とみる説もある。

と中嶋氏。  
それを粉砕したのが華国鋒の決断だったわけだ。「そこに華国鋒とさる十月十日付の三紙誌共同社

「李先念は、いわば、許された走資派、鄧小平は、許されざる走資派」ともいえる」(中嶋氏)  
「といつて、華国鋒はそうした勢力のカイライではない。彼も独自の決断力を持ち、毛沢東の遺体の永久保存や金策・運架の編纂をせむぶ自分の仕事として引きつけている。この二つの事業の党決定



李先念氏

菊花氏も、慎重ないまわしなから、「文革派をいつまでも逮捕・拘禁していても、思想が変わるわけがないから……」と、竹内説を否定しない。  
北京からの報道にも、処刑がな

「既定方針にしたがつて」といっても、九月二十九日付の「人民

独走、の側面があつた」(竹内

説、告ぐる書、の学習を全国でや

らせるなど、己の威信を高める布石も打っている」と竹内氏。いずれにしろ、ことしの四月に

# 女帝江青に誤算があった

「江青夫人は何らかの形の復讐を受けるに違いない」

菊地氏は、こんな予感を持って

いたという。  
「一九六八年に初めて訪中して映画館に入ったら、毛主席がでると大拍手、林彪がでると拍手なし、江青夫人が映ると観客から冷笑がもれたのでびっくりしたんですよ。」

そして今年の天安門事件の直後に訪中すると、純粹に周首相の死を悼む気持ち、反革命の陰謀として抹殺された民衆の鬱屈した微妙な感情が感じられましたね。「めん鶏が時を告げるとロクなことがない」とか「西太后」とか、明らかに江青夫人をあてこするブ

華國録首相が登場したとき、文革派と実務派のバランス人事というのが一般的な見方だった。だから驚きの声が出はじめています。

ラカードもあつたようですが、寄せられた膨大な花輪を撤去する解放軍兵士は、泣きながらその作業をやっていたそうですよ。そしてそれを命じたのが江青夫人だといことが、口から口へとパトックと伝わったと聞きました」

ここ数年、文革派に批判された実務派の人たちの間に、「算帳」という言葉がささやかれていたという。「おとしまえをつける」といったほどの意味だが、いずれ文革のときの清算をするぞ、と実務派の面々は考えていたのかもしれない。だとすると、「算帳」される中心人物は、ほかでもない江青であつたはずだ。

それにしても、江青夫人はなぜこうした潮流を読み違え、主席の座を求めるといふ大それた夢に出たのか。三氏の江青評はきびしい。

「腹心の王洪文を主席に押し上げて、自分は陰で家父長的に操ると

ら、「ここまで決断してやるとは思わなかった」(竹内氏)といつた驚きの声が出はじめています。

という方向も考えられたが、結局、彼女は自分の周囲が見えないひたつた」  
と、竹内氏。

「上海グループについても、それは彼女のお色気の及ぶ範囲といふことを、中国人は体質的に知っていた。政治をこんなに私物化されたんじやかなわん、という反感を民衆はつららせていたんじやないでしょうか。京劇の現代化の分野にとどまっておればよかったのですが……」(中嶋氏)

「それとは反対に、夫をたてて自分はへりくだっている周恩来夫人

と、竹内氏。  
「張春橋は周死後の首相候補として、華國録の対抗馬だったのですからね。ただひと口に文革派といつても、思想としての文革派、官僚としての文革派、路線としての文革派といろいろあつて、こんど上海グループは人脈としての文革派だと思ふ。それも江青、王洪文、姚文元が核で、張春橋は少しはずれていた。にもかかわらず、彼はついに泳ぎ切れなかったといふことですか」

# 鄧小平の再復活はあるか

こんどのクーデターが起つたあと、さる四月に失脚した鄧小平が広州から北京にむかつたという情報の流れ、今度は鄧再復活の可



陳 錫 聯氏

性を取り沙汰されている。  
「右が消え、左を切つたあとだけに華國録の路線選択の幅は小さく、ちよつと右に寄れば走資派といわれるだろうし、ちよつと左に寄れば文革路線のものになつてしまふ」  
と、舵取りの難しさを指摘す

るのは菊地氏だが、中嶋氏は、「華国録と鄧小平は地下水でつながっている」とみる。

「四月の鄧失脚のとき党権剥奪はなかったでしょう。今はまだ華国録も李先念も「抗鄧」をせざるを得ないが、「いざれ情勢を見て……」という戦略があるんじゃないか。毛沢東委員をみて、鄧小平系統はほとんど消えていないし、鄧系の万里鉄道相の復活、鄧小平がテレビ映画に再登場するといったクーデター後のニュースからすると、実務派の大復活は意外に早いのではという気もする」

華国録は、いまのところ、周・鄧路線につながる「四つの近代化」（工業、農業、国防、科学技術の近代化）については、まったく触れていない。一方、鄧小平批判は、言葉の上では続けられている。「しかし」と、中嶋氏は、「華国録が今度の事件の実戦部隊の指揮官だったとすれば、鄧小平、あるいは全く新しい人物が、華国録をおしのけて出てくる可能性もある」



鄧小平氏

と予測する。これに対して竹内氏は、華国録と鄧小平をふくむ「合意の範囲」はまだできていないとみる。

「時期が早かったし、華国録の思

# 脱・毛沢東の可能性をみる

「江青らのクーデター未遂事件の実質は、華国録クーデター。だっ

たと思うが、これは結局、反文化大革命クーデター」ともいえる。なぜかといえば、陳伯達、林彪の失脚に続き、こんどは上海グループと、文革の推進者がごとごとく消えてしまったのですからね」と中嶋氏。

日本からは強大な勢力に見えた文革派の大後退——。中国の、脱・毛沢東化は、石が坂道をころがるように始まるのだろうか。菊地氏はこう反論する。

「生産点に下放したまま、大学入りを拒否した青年は膨大な数になる。彼らはいま人民公社の幹部として、社会の中堅になろうとしているわけですが、毛思想への帰依はさまざまにある。物質的

い切りが良すぎるというか、独走の気味がある。解放軍が支持したといっても確かなのは北京に限られていてではないか。そんな中で、華国録は第二の毛沢東をめざして走り出した。それが皇帝型権力を求める民衆の心理とも見合っ

ていけるわけで、華国録は、党中央委主席と党軍事委主席のポストは絶対に離さないでしょう。

鄧小平には人民代表大会の常務委員以上のもものは渡さないのじやないかな。それに鄧小平が満足するかどうか」

労働や学習の態度が、がっちり勤務評定されている。選ぶものと選ばれるものは厳然と残っているわけだし、幹部子弟の優遇など、以前より平等になったといえない面もある。

また消費面ではカメラブームなんか起こっているけれど、人々はカメラを買うために時間外労働や家庭副業をしたり、労働点数の貸し借りをしていると伝えられますね。文革後の毛思想の徹底の中で、こうした傾向がますます進行しているわけですよ」

鄧小平らの物質的刺激主義と、毛沢東の精神主義は、同じ矛盾の解決策として登場しながら、どちらも行き過ぎがあった、と竹内氏は指摘する。

「中国は、文革前の、少なくとも一九五七七年ころの路線にかえるのではないか。今はまだ絶対的な毛沢東の権威も、歴史の中で必ず相対化される。反文革派による毛沢東の「算賬」は始まったとみていい」

と、ズバリ予言。一方、日本の親文革派の間で、「付き合いきれない」という声が開かれることについて、竹内氏はいう。

「ここで中国が嫌いになってもそれは困るな。美化して見るのではありません。あるがままの中国と付き合っつてゆく方法と態度を考え

ただ、権威としての毛沢東は、「当分は全面否定はあるまい」（竹内氏）という。そうでないと、少なくとも華国録体制にとっては、依拠する権威がなくなるからだ。中嶋氏は、

「中国は、文革前の、少なくとも一九五七七年ころの路線にかえるのではないか。今はまだ絶対的な毛沢東の権威も、歴史の中で必ず相対化される。反文革派による毛沢東の「算賬」は始まったとみていい」